

動物のいる場における人と人とのコミュニケーション

— 伴侶動物に発話を宛てるやり取りに着目して —

居關友里子(国立国語研究所)

1. はじめに

古くから愛玩を目的とし家庭で飼育されてきた動物、いわゆる「ペット」は、人間社会の一員としての存在に変化し、それに合わせて呼ばれ方も「伴侶動物」あるいは「コンパニオン・アニマル」といったものに変化してきた(キャッチャー・ベック, 1994). 伴侶動物に対する関心は、人と伴侶動物との間に生じる関わり合いとして、心理的結びつきのあり方や触れ合うことを通して得られる効果などに向けられているが、加えて、人と人との間に生じるコミュニケーションや関係性の促進といった社会的効果についても実験を通して明らかにされつつあり(Bernstein et al., 2000 ほか), 医療や介護の文脈でも関心が持たれている. 後者の, 伴侶動物が人同士の間のやり取りにおいて具体的にどのような役割を果たしているのかについてTannen(2004)は、犬を含む家庭での相互行為の分析を通して、犬が人と人との仲介する相互行為上の資源として貢献していることを指摘している. 本研究でも、この伴侶動物が持つ人同士のやり取りをふくらませる性質に注目する. 特に会話参加者が人ではなく伴侶動物に発話を宛てるやり取りについて取り上げ、ここで参加者間のやり取りにはどのような展開がもたらされ、それによって何が可能になっているのかについて記述、考察を行う.

2. 先行研究

Tannen(2004)は、二つの家庭で収録した家族間の会話データをもとに、彼らがともに暮らしている犬がどのような相互行為の資源として利用されているのかについて分析を加えている. 参加者たちは、犬として話す、犬に宛てて話す、あるいは犬について話すことを通して、会話のフレームやフットィングの変化を生み出し、批判を和らげること、犬の振る舞いと子どもの振る舞いを対置し、親が子どもに価値観を提示すること、家族というアイデンティティを構成したり強化したりすることなどを達成していることが指摘されている. 本研究は、このような事例の一つとして、犬に宛てて話すことがどのようにして人同士の会話の展開に寄与しているのか、そしてなぜそれが人ではなく犬であることによって可能になっているのかに注目する. なお、動物と人間の相互行為の分析手法に関しては、動物の意図をどのように扱うべきか、これを人間に擬えて解釈することの是非が問題となり、長く議論がなされてきた(Mitchel, 1997 ほか). 本研究の関心は、人々がコミュニケーションの中でどのように伴侶動物を相互行為の中で扱っているかにある. そのため、動物の心理そのものに踏み込むことはせず、当該文脈の中で、実際に観察可能な動物の振る舞いをもとに、参加者たちがそれをどのように理解し振る舞っているのかを相互行為分析の手法を用いて記述する.

3. データ

データは『日本語日常会話コーパス(CEJC)』(小磯ほか, 2023)を使用した. これは、協力者が自身の生活の中で生じた会話場面を研究者を介さずに収録した音声・映像データを格納したコーパスである. 伴侶動物の参加の有無や活動の内容などについて特段の指定は行われておらず、そのため収録されたデータには、人々が普段の生活の中で体験している伴侶動物との関わり合いが反映されているものと考えられる. 本研究は犬を家族に持つ協力者である吉田(仮名, 40代女性)の収録した会話データを扱う. 以下で見ていくのは、彼女の伴侶動物である犬のノビと参加者複数名が同じ場におり、会話が行われている場面である. このうち、会話参加者の一人がノビに発話を宛てる振る舞いに注目し、このことを通して参加者たちがどのようにやり取りを展開させているのかについて見ていく.

4. 分析

参加者の一人が犬に発話を宛てて行っている行為として観察されたのは、「問いかける」「同意を求める」「報告する」「指示を与える」などである. これらの発話がやり取りの展開にどのように利用されているか、三つの事例を取り上げ見てみた

い。一つ目に挙げるのは、吉田が実家に帰省し、両親と机を囲み団らんしている際に観察された、犬のノビに発話を宛てるやり取りである。ノビはすでにいくらのおやつを吉田の母からもらっており、事例1のやり取りを通してさらにもう一欠片のおやつをもらうことになる。

[事例1]それで終わりにしなよ(T014_006-0213)

1. 父: あ.: (歩いてく てく). ((ノビが吉田の母のもとに歩み寄っていくのを参与者全員が見る))
2. (0.2)
3. 吉田: お. ()あ.: おばあちゃん [とこ行った(よ/の) [また.
4. 父: [↑な.
5. 母: → [どうする. もらう? ((ノビに視線・おやつを指差し))
6. (0.3)
7. 母: → これ.=
8. 吉田: =あじゃ↑これもらいな. ((吉田の食べかけのおやつを母に差し出す))
9. 母: ° はいよ. ° ((おやつを受け取る))
10. 吉田: もうちっちゃくして.
11. 父: 一回り [回って?
12. 吉田: → [だそれで終わりにしなよ.

ここでは、母(「おばあちゃん」, L3))に歩み寄ったノビの振る舞いをきっかけに、母によるおやつをもらうかどうかを尋ねる発話(L5, L7), そして吉田がおやつに関して指示・言い聞かせる発話(L12)が生じている。これらの発話はおやつを「もらう」というノビに視座を置いた授受表現の使用(L5), ノビに向けた視線, また言い聞かせるような口調(L12)で産出されることによって、ノビを宛先にした問いかけと指示・言い聞かせとして聞かれる。

発話を聞いた参与者たちの反応としては、前者の発話(L5, L7)は吉田による判断(L8)を引き出している。後者(L12)は、抜粋以降のノビがおやつをもらい終えた際の振る舞い(母は追加のおやつについて言及せず、「おわりだって」とノビに言い聞かせている)から、以降のおやつに関わる宣言として聞かれていると考えられ、母の発話は吉田、吉田の発話は母を間接的な標的(Levinson, 1988)として機能している。いずれも直接人に宛てることもできる行為ではあるが、ノビを介してこれらの行為を間接的に向けることは、自身の振る舞いに対する特定の理解を防ぐことを可能にしていると考えられる。母は5, 7行目でノビに問いかけ、そのノビの反応を吉田に見せることによって、ノビがおやつを求めていることを表示している。ここで直接吉田に判断を要求する発話を宛てるならば、それはおやつをあげることの催促として聞かれ得る。犬の健康に配慮しようとした場合、すでにいくらのおやつをあげた後には行いにくい行為である。また、手渡したものが最後のおやつだと直接母に宛てることは、母がおやつを与えることを催促したとして吉田が聞いたことを示し得る。ノビに発話を宛てることによって、このような不都合な理解を回避しながら参与者の反応や理解を引き出すことが達成されているといえる。

同じ参与者たちの間でなされたやり取りについて、もう一事例見てみたい。事例2では、すでに参与者たちが十分に知っている事柄が、ノビに問いかける方法で提示され、話題として取り上げられている。

[事例2]自動車乗ってきたよな(T014_006-0517)

1. 吉田: いっぱいたべてたじゃん. もうおしまいだよ?
2. (0.6)
3. 父: → ノビちゃん自動車乗ってきた(よ) ↑な.
4. (0.3)
5. 吉田: きょうはずっと前に乗ってたんだよ[ね.
6. 父: [ん.
7. 母: あ.(.)そうか.(0.2) [よかったね.(.)よかつ[たね.
8. 吉田: [途中から~~ね~~. [あ寝てたんね.

1行目以前では、吉田と両親の間で雑談が行われており、ノビはこの間おやつもらう。それを終えても依然として机のそばにいたノビに対し参与者たちは終わりを諭すことばをかけつつ(L1), 注意は緩やかにノビに向けられていた。ここでなされたのが3行目の父の発話、視線と名前を呼ぶことでノビに宛てた、移動手段についての同意要求である。続くのは父の発話

に対する同意を含み、ノビと吉田のみが知る新しい情報を付加した吉田による同意要求(L5)、さらに母もノビ視点からの評価について共感を求める(「よかったね」、L7)。ノビはこの間、発話による反応を返すことは当然ないものの、発話者をつめて口角を上げた表情を継続している。父、吉田、母はそれぞれ発話をノビに宛てつつ、参加者が提示した発話を踏まえた発話を行うことで話題を展開し、ノビが会話に参加しているかのように扱っている。

注目したいのは話題の開始となった3行目の発話である。日々繰り返し行われる行動の指示などとは異なる一回的なもので、そのためノビからは発話の意味を理解した反応が返されないことが強く予想される。また、吉田が車で帰省したことは参加者間ですでに共有されていることから、新しい情報を示したり、具体的な情報を求める発話としては聞かれない。特定の反応が期待されにくい話題を場に取り上げるに際し、これを参加者に宛てるのではなくノビに宛てることは、話題を続ける、発話で応じることはせずにノビの反応を皆で眺めるなど、参加者たちができる次の振る舞いに幅を生んでいると考えられる。

発話をノビに宛てることは、参加者同士のやり取りの調整に利用されていることに加えて、この場面をどのような機会として形作るのかについても利用されていると考えられる。ここまで見てきた事例1と事例2は、いずれも吉田が犬のノビを連れて帰省した際の会話であった。父がすでに分かっていることを皆の前でノビに語りかけたり、吉田と母がノビ越しにおやつややり取りを行うことは、やり取りの焦点がゆるやかに犬に向けられている状態を利用したものであると同時に、家族としての犬と吉田の両親が触れ合う機会としての団らんという、帰省における一つのイベントを形成することを行っていると考えられる。

一方で、伴侶動物のいる場でのやり取りは、常に犬が中心となる出来事として経験されているわけでは当然なく、犬がいる場で犬が全く関わることなく進行するやり取りも多く観察される。また、人同士の間で進行していた会話に、途中から犬を取り込むことでや会話の展開に変化を生み出す様子も見られた。最後に見る事例3はその一例で、吉田が夫と二人で食事をしている場面である。そばにはノビがいる。二人は最近利用した移動手段について話しており、夫は飛行機が怖いためその利用を避けたことを述べる。これを受けた吉田は、飛行機の何が怖いのかについてさらに尋ね(L1)、理由の説明を受ける。

[事例3] ノーちゃん聞いた? (T014_001b_0418)

1. 吉田: ¥なんで?(0.6) きゅ: うきゅ-¥
2. 夫: ()
3. 吉田: 緊急:だから座れって言われ(.)た時怖いから? =
4. 夫: =離着<陸>の時>トイレ行けないじゃん.<
5. 吉田: 行かない_(.)でもちよつとの間じゃ(h)ん.
6. 夫: °それがやでさ° (.)すごいプレッシャーなんだよ[ね: ↑え.]
7. 吉田: [h :: h]
8. 吉田: ¥墜落より¥も?h
9. 夫: うん.hh
10. 吉田:→ .hhh 墜落よりもね:え(.) トイレが早:早く:入れないのがやなんだ↑てノーちゃん.
11. 吉田:→ ↑聞いた:?
12. (1.2)
13. 夫: 一回トイレ行ったらもう着陸体勢だからい:行っちゃだめって言わ[れて死ぬかと思ったもん.° ほんとにね.°
14. 吉田: [hh hh]
15. 吉田: .h .h そうゆうプレッ(h)シャーに弱(h)いよね.お(h)と(h)こ(h)の人って.

吉田が夫の理由の説明を受け(L6)、その内容の確認を終えた直後の10、11行目を見ると、夫ではなくノビに発話を宛てていることが、犬の愛称(ノーちゃん、L10)を呼ぶことによって明示されている。この発話を通して何が可能になっているのだろうか。まず、やり取りに関わっていなかったノビに宛てた発話とすることによって、直前までの数発話に分けて提示された発話の要点をまとめ、吉田がこれを再度提示し直すことが適切となっている。加えて、述べられてきた夫の感覚を「おもしろおかしい」「理解しがたい」として評価する態度を示し、これがノビの共感を得られるものとして振る舞うことで夫に対立する吉田・ノビという擬似的なチームを組んでからかってみせている。その一方で、飛行機の墜落やトイレに行けないことの恐ろしさを知らない犬という存在と組むことによって、この対立が遊びのものであることも明示されているといえる。対立に組み込まれた夫は、からかみの対象となった感覚を「死ぬかと思った」という表現を用いて格上げし(L13)、自身へのさらなるからかみを誘い、吉田の組み立てた遊びとしての対立を維持しようとしていることが見て取れる。

通常、会話の中でチームを形成するには三人以上の人間が必要になる。事例3は参与者二人の間で犬に発話を宛てることを通して擬似的に参与に取り込みこれを可能にしている。そして、このチームの一員が犬であることは、対立そのものを遊びとして明示的に粹付けることにも寄与しているといえる。

5. 考察

4節では会話場にいる犬に発話を宛てる三つの事例を取り上げ、自身の発話が他の参与者に特定の聞かれ方をすることを防ぐことや(事例1)、特定の反応が期待されにくい話題を取り上げること(事例2)、また、参与者間で展開していた話題に犬を誘い込み擬似的なチームを組み立て、遊びとしての対立をもとにやり取りをふくらませること(事例3)に利用されている様子を見てきた。これらの会話の中で伴侶動物である犬は、参与者の一員として扱われていた。その一方、他の参与者である人間たちとは異なる存在として扱われてもおり、それによって可能なるやり取りがあると考えられる。犬は発話を宛てられても、それが一回的な発話や複雑な発話であれば理解することが難しい。そして、発話という形で反応を返すことはできないという期待がある。しかしながら、参与者に歩み寄ったり、発話者を笑顔のような表情で見つめたり、あるいは発話に全く反応しないといったような身体的振る舞いが参与者たちにさらされている。人は伴侶動物と関わる中で、しばしば動物の心の読み取りを行っており(藤崎, 2002)、犬が感じていることは実際には分からなくとも、自身の発話を聞いている、理解している、同意しているなどのように扱うことができ、その扱いは他者に見せることができる。そして、心の読み取りに関わる動物の身体的振る舞いは、それ自体が人同士の話題になり得る。このような観察や話題の対象であり、参与者でもあり得るといった柔軟な性質が、人と人とのコミュニケーションに利用されていると考えられる。

6. おわりに

以上では伴侶動物と人同士との間に生じる相互行為を取り扱い、参与者である人間と動物との間で異なる、発話を宛てる際に生じる期待が、相互行為に利用されていることを見てきた。今後は、他の伴侶動物とのやり取りの分析に加え、類似の性質と異なる性質の両者を持つ幼児との比較を通して、伴侶動物が持つ相互行為に利用可能な性質に関して考察を進めたい。動物および幼児に対する相互行為では、高い声や繰り返し、単純な語彙の使用などといった共通の特徴が指摘されている(Mitchell, 2001ほか)。また、その存在があることで「場が持つ」感覚についても共通のものがあるように思われる。その一方で、道徳的規範や言語発達への志向は両者で異なっているだろう。これらについて今後検討を行ってきたい。

謝辞 本研究は科研費 22H00654, 22K13109 の助成を受けて行われたものである。

参考文献

- Bernstein, P. L., Friedman, E., & Malaspina, A. (2000). Animal-assisted therapy enhances resident social interaction and initiation in long-term care facilities. *Anthrozoos*, 13, 213-224.
- 藤崎亜由子(2002). 人はペット動物の「心」をどう理解するか: イヌ・ネコへの言葉かけの分析から, 発達心理学研究, 13(2), 109-121.
- キャッチャー, A. H.・ベック, A. M. (編), コンパニオン・アニマル研究会(訳)(1994). コンパニオン・アニマル: 人と動物のきずなを求めて. 誠信書房.
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・藤越・西川賢哉(2023). 『子ども版日本語日常会話コーパス』の構築. 『国立国語研究所言語資源ワークショップ発表論文集』1, 103-108.
- Levinson, S.C. (1988). Putting linguistics on a proper footing: explorations in Goffman's concepts of participation. In P. Drew and A. Wootton (eds.) *Erving Goffman: Exploring the Interaction Order*, 161-227. Cambridge: Polity Press.
- Mitchell, R. (1997). Anthropomorphism and anecdotes: A guide for the perplexed. In R.W. Mitchell, N.S. Thompson, & H. Lyn Miles (eds.), *Anthropomorphism, anecdotes and animals*, 407-427. NY: SUNY Press.
- Mitchell, R. (2001). Americans' talk to dogs: Similarities and differences With talk to infants. *Research on Language and Social Interaction*, 34(2), 183-210.
- Tannen, D. (2004). Talking the dog: Framing pets as interactional resources in family discourse. *Research on Language and Social Interaction*, 37(4), 399-420.